
この手が好き

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この手が好き

【Nコード】

N5494K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

キャバクラ嬢に誘うバイトしてる大学生の板戸類。今日も誘った女は。

口紅の色は抑えて、ローズなんだけど唇と同じぐらいに渋い色。彼女は大学生になったばかりだろう。背伸びしての化粧が見えて、ぎこちない感じがする。高校生の時はすっぴんだったくせに、わずかに卒業からの2週間で化粧をし始める。女って不思議だ。

都会の子って面白くない。田舎から出てくると、親の縛りがなくなつて、一度にはじける奴が多い。だが、家から通う子は相変わらず丸ごと親抱えだからアマちゃんが多い。金の苦労もしなくていいし、部屋を出されることもない。家に帰れば飯も出てくる。つまり、幾つになつても食事も作らなくて洗濯も掃除もしなくていいのだ。口うるさくても、我慢すれば腹が減つてどうしようもないなんてことはないのだ。アイロンだつて、やつてと頼めばしてくれるし、弁当も作ってくれるという。至れり尽くせりなのだ。学校の時間ぎりぎりまで寝て、起きて食卓に座るだけで出てくるご飯。

羨ましいが、俺はそんな子はお呼びでない。俺の仕事はキャパクラ嬢のスカウト。苦学生がいいのだ。この子はそう見える。少し野暮ったい服に慣れない化粧。

「ねえ、日当すぐ払うけど、やってみない。酒を注ぐバイト」「無理です」

「でも、昨日も4時間で1万2千円助かるって、喜んで帰ったよ。M大の学生」

「えっ、M大の子もやってるの」
引っかかった。すると、彼女は目を見開いた。

「うん、そうだよ。T大だっているよ。1週間がんばったらおまけにプラス1万。安心な大手企業の社長がメイン。就職の手引きだつてあるかもしれないぜ」

「嘘、そんなこと」

「一度来てみない？ 名刺渡すよ。僕板戸類」

ふーん、名詞と僕の顔を見ながら、彼女は言った。

「私、類のこと覚えてるよ」

「えっ、誰？ 君」

「私？ 前橋ルイ」

「えーっ、お前もルイって名前？ でも、俺は知らないぜ」

「あなた、S大でしょう」

「ヤバイ、誰だこいつ。思わず、渡した名刺をひったくる。」

「ねえ、返してよ」

誰が、知り合いなんか入れるか。知らん顔してその場を離れる。すると、

「類のバカ！ おたんこなす、お前の母さんでべそ」

なんだあ、今時昭和の香りのする悪口は。ルイ、前橋ルイ。ルイ、一人いたな。園田ルイ。あれは小学校の3年ぐらいか。引越して行った奴だ。あいつか。振り返ると、泣いていた。

「どうして簡単に忘れるわけ？ 私なんか11年間も覚えているのに」

「お前、前橋って言わなかったじゃん。園田だろう」

「だって、離婚したんだもん。母さんの方に行ったの」

「ふーん。今度ゆつくり会おうか。まだ仕事中で、さっきからあそこで先輩が見てるから」

「わかった。いつ？」

「明日の昼、あそこに見える喫茶店」

ルイはうなずいて、さっきの名刺をくれというから渡すと、自分のメルアドを書いてよこした。何だか、その日はハイテンションになってバイトした。ルイに会ったからだろうか、先輩の浜ちゃんが「いいじゃん、さっきの女の子、ノッて来たんじゃないのか、話に無理、あいつは昔の同級やった」

「そうか、お前の過去を知ってるのか」

「言うほどの過去はないですよ」

翌日、ルイはやって来た。化粧は薄めにしてたが昨日よりずっと

可愛い。GパンにTシャツだが、ニットのベストが可愛い。

「今、学生？」

「うん、夜間に行ってる。まだ4年。高校。類はS大でしょう」

「何で知ってるの」

「新聞の予備校の広告に写真が出てた」

「ちっ、それでか」

ルイはフンと笑ってアイスコーヒーを飲む。夜間の高校ということは仕事もしてるってことか。

「仕事は何」

「家の近くの食品工場。母さんと二人ではお金が無くて。親父は離婚したときも金目になるもの全部売ったから。破産したから協議離婚」

「そうかあ。お前できてたもんな、勉強」

「小学校の頃はね。中学校では荒れちゃって、でも、入ってくる金もないから、しまいには遊んでもらえなくなって、馬鹿らしくなって。勉強しようかなあって気になったの」

「ふーん、俺なんかずっと遊んでばかり」

何だかルイと話していると、自分が恥ずかしくなってきた。文句は言うくせに親の金で予備校も行き、今はこんなえげつないバイトも平気ですてレジャー費を稼ぐ。彼女は今はいない。この前別れたばかり。誕生日にブランドをせがまれて無理して買ったのに、バッグが小さいって文句言われて一気に冷めた。ルイは、夜間の高校に行くしながら、給料は半分は母親に渡してるって。金額こそ言わないが10万ぐらいだろう。足りないぐらいかもしれない。その半分を渡してるって。俺の遊ぶ金より少なくてどうやって暮らしてるんだ。ルイはしばらく話した後、学校が始まるからって帰っていった。

「おい、明日も会えるか」

「明日は無理。工場の仕事があるから。日曜の夜なら学校が休み」

「それじゃ、日曜に会おうよ」

「ねえ、珍しいからでしょう、私みたいな子」

「別に楽しかったから会うだけさ」

「いいよ、私は類のこと懂れてたし」

昔の俺はもつと可愛かったよな、人のこと心配する正義感あふれる男だった。いつの間にか、人を不幸に引きずりこむようなバイトを平気でしてた。こんな仕事はやめようと決心した。先輩の浜ちゃんに言つと、いい腕あるのにと惜しまれたがそんな腕いらんわ。

彼女の働きながら通う高校に行つてみた。ぴつたりではないが続々とやってくる若者たち。別に労働者という雰囲気はない感じの若者も結構いる。だが、小走りでくるルイ大きなバッグを手に走りこんで行つた。化粧ははげて滑り込みだが、近くにいた男たちと仲良く話している。あの輪に入りたいと率直に思った。2時間が過ぎて出てきたときに、後ろから声を掛けた。

「勉強終わった？」

「半分寝ちゃつた。先生に悪いけど。待つてくれたの？」

「そういうわけじゃない。たまたま」

「フンと笑いながら、ルイはパンを半分割つてくれた。」

「資格が欲しいの。高卒だと給料が違うの。動機が不純？」

「いや、当たり前のことだ」

「私が転校する時に、類が校門まで送つてくれたの。そして言ったの。俺とおまえは同じ名前だから、双子みたいなもんだつて。また、遊ぼうなつて」

そんなこと言ったのか、すっかり忘れてたけど、いっばしの口をきくガキだったんだと笑えた。ルイはその言葉を忘れることはなかったつて。

「ルイ、今度の休みにどっかへ遊びに行こうぜ。喫茶店でちょこつとでなく」

「うん、ありがとう。私、この年で初めてデートに誘われた。悪ぶつてた時はデートなんて誰も声を掛けてくれないし」

「おう、俺もこういふデート初めてだ。誘つておいて初めてというのもかっこ悪いけど」

初めて尽くしのデート。手をそつと握ると、ルイは「ごめん、手が荒れてて恥ずかしい。洗浄液にまけちゃって」
今、俺、恋してます。この手、好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5494k/>

この手が好き

2010年10月8日14時26分発行